HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	川端康成の研究 : モダニズムの方法をめぐって [全文の要約]
Author(s)	常, 思佳
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13404号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74486
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Sijia_Chang_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　常　思　佳

博士論文の題名

川端康成の研究――モダニズムの方法をめぐって

・本論文の観点と方法

本論文は、日本近代文学の作家・川端康成について、その小説及び随筆に内在する〈詩的精神〉の諸相を重層的に論じる試みである。主に、一九二〇年代から六〇年代にかけて発表された小説を対象に、それぞれのテクストに見られる言語表現を、各時代の文学（史）的な言説と交渉させながら、川端文学の根幹をなす「モダニズム」の問題を詳細に分析しようとする。また、そのような問題を究明するために、戦前と戦後のテクストが、前衛・モダニズム／伝統・日本回帰という二項対立の図式で評価されている研究史を批判的に検討し、戦前・戦中・戦後にかけて、小説の言葉表現を貫く連続性を論証した上で、その（非）連続性と変容の内実に迫る。

このような観点に基づき、本論文の研究方法としては、小説の言葉表現に注目する。二〇世紀二〇年代から、特に第一次世界大戦の直後に、様々なジャンルにまたがって同時に行われた西洋のアヴァンギャルド運動に逢着した川端が、メディア・テクノロジーの発達によってもたらされる新しい言葉表現をどのように実践したのかを検証する。小説の領域においては、その最小単位である言葉の表音性・表意性・視覚性などが、文の組み合わせと繋がり、さらに物語が生まれる様相を明らかにしようとする。また、日本の古典や外国の文学作品などを引用するだけではなく、絵画や音楽などの異なるメディアからのイメージを借用し、小説の言葉表現によって書き換えて、言葉表現の可能性と限界をどのように追求したのも分析する。より幅広い歴史と社会的なコンテクストと接続し、川端文学の評価史を更新することを試みる。

・本論文の内容

本論文は、序論・結論と本論全三部九章で構成されている。序論では本論文の問題設定を行っている。本論文は、片山倫太郎の初期から『雪国』にかけての諸作品に潜在する〈詩的精神〉を見出そうとする視座と、仁平政人の提起した「言語」の習慣性、集団性が私たちの「現実」に対する認識を制約しており、それを打破し、言葉の創造的な機能を追求しようとする視座を共有している。序論ではその問題を明確し、特に、川端のテクストにおいては、〈詩的精神〉に関わる言葉表現を縦糸として、戦前・戦中・戦後を通して、その（非）連続性や〈歌物語〉への変容などを概観する。そこから、長編小説を生成する川端の方法論の一端を浮上させる。

第一部では、西洋のモダニズム文学（芸術）が日本に移入した一九二〇年代にかけて、〈小説〉や〈詩〉などの既成の文学ジャンルを変革する動向のなかで、雑誌『文芸時代』を陣地として本格的な小説創作を始めた川端が、新感覚派から新興芸術派の

作品を通して、特に小説家「私」を主人公とする〈芸術家小説〉の系譜に沿って、近代小説に内在する〈ポエジー〉(「詩的精神」) と〈散文精神〉との諸相を検討していたことを明らかにした。

第一章「伊豆の踊子」論は、一高の学生だった川端康成をモデルにした私小説としての側面を踏まえ、「私」の眼を通して、旅先・伊豆の風景をめぐる記述を挟みながら、二十歳の「私」の思い出を回想することを明らかにした。人間の心象が、〈水〉や〈雨〉などの自然現象として現れる、いわば「寄物陳思」の古典的な主題について、ドイツ表現主義やフランスの戦前派映画の手法を参照しながら、叙情性のなかで、言語の表音性 (オノマトペ) を抽出し、視覚性 (心象) との関係を明らかにすることで、そのアヴァンギャルト性を考察した。

第二章「ある詩風と画風」論は、ある同一の対象（＝狂気の女）をめぐる、画家と詩人の創作観を踏まえ、近代小説に内在する「ポエジー」の構成を、小説家「私」は、画家と詩人との対話を解釈することで明らかにしたことを考察した。これは、立体派的な画風を導入した近代小説に見られるような、新興の「詩的精神」となっており、芥川龍之介と谷崎潤一郎との「話らしい話のない小説」論争から生まれた「詩的精神」まで遡ることができる。また、同時代の詩誌『詩と詩論』紙上に見られる春山行夫の「日本近代象徴主義詩の終焉」などの言説と交通するテクストであると言える。

第三章『浅草紅団』論は、小説の〈詩的精神〉と対立する演劇性をめぐって、フランスの詩人ジャン・コクトーが提出した「舞台の詩」に着目し、「浅草」を舞台とする超現実的な空間のなかで、演劇の台本を書く小説家「私」が道化役を演じることを通して、劇的な「ポエジー」から導かれた小説の筋の生成を考察した。フランスの〈エスプリ・ヌーヴォー（新精神)〉は、プロレタリア文学と対抗する〈新興芸術派〉の陣営に属する川端の理論的支柱となり、小説の内外において、積極的に実践していたものであると結論づけた。

第二部では、第一部での視座を前提に、一九三〇年代の作品を取り上げて、小説の言語表現と視覚メディア（絵画・写真・映画）との相互関係に注目し、その諸相を考察した。

第四章「落葉」論は、日本の新舞踊運動を行った舞踊家・藤間静枝をモデルとして、「彼女」の形姿に、菱田春草の絵画《落葉》と「新日本音楽」を創造した宮城道雄の音楽「落葉の踊」が借用されていることを明らかにした。小説「落葉」は、絵画の《落葉》を「彼女」の心象として可視化し、音楽の「落葉」とあわせて、西洋舞踊に由来したロンド詩型として構成されており、これを新心理主義小説であると位置づける。

第五章「散りぬるを」論は、女性の死体写真という「現実」に触発された小説家「私」の想像力によって、訴訟記録の文字に書かれた「現実」と異なる殺人事件の真相を、精神変質者の殺人犯と「私」が（非）同一化することによって、理性的に再構築されていることを明らかにした。写真の物質性と小説言語の虚構性との齟齬に注目した小説家「私」は、仏法の歌を再解釈し、書くことの倫理を求めていたことを論証する。

第六章『雪国』論は、映画の運動性に注目し、移動中の汽車の窓ガラスを映画館の比喩表現として捉え、そこで、フランス文人達の舞踊論を翻訳した島村が、結核で死に行く行男のために苦労する駒子の物語に接し、自分の「従労」への肯定と自己浄化へと導いたことを考察した。

第三部では、戦後の諸作品、特に「古典回帰」と評価される作品群を取り上げて、

戦前のモダニズム文学との連続性と非連続性を考察した。西洋の複製芸術（写真・映画）と異なる日本の古美術（陶芸・和歌・着物）を手がかりに、戦後のファミリー・ロマンスを主題とする長編小説のなかで、女性をめぐる結婚関係、および新しい共同体の形成への志向を検討した。

第七章『千羽鶴』論は、戦前の「新感覚派」的な言語表現と接続される〈茶碗〉の触覚性と物質性に注目し、現代のテクノロジーである電話線とともに、縁談・結婚・破倫の複雑な人間関係を結ぶ象徴であることを検証した。この小説は、敗戦の廃墟から社会の秩序を取り戻して、戦争を生き延びた主体性を検討しながら、戦後日本の家族と共同体を描いたものである。

第八章『波千鳥』論は、万葉集の相聞歌を引用した手紙に注目し、書き手と読み手の心象風景の重なりから、戦前の新心理主義小説に接続できる作品だと位置づけた。このように、伝統的な和歌を書き換えることで、小説の読者の記憶を喚起させる効果をもたらしたのである。また、本編『千羽鶴』に登場した実物の〈古美術品〉と虚構の和歌は、重層的な歴史の記憶と戦後の現在を同時に浮上させながら、新たな共同体の記憶を編成するのである。

第九章『古都』論は、京都で着物を経営する老舗の二代目が、パウル・クレーの前衛絵画から、植物の「メタモルフォーゼ（Metamorphose 変態）」の造形方法を取り入れて、養女との親子関係を結ぶための帯の図案を設計した、と解釈した。伝統的な帯の横糸と縦糸を、一卵性双生児の染色体を連想させる構造と見なして、前近代的な〈養子縁組〉のような家族関係を解体させ、アヴァンギャルド的な着想に基づく幻想的な婚姻・家族関係を描き出して、戦後の新しい共同体を形成させる紐帯であることを検証した。

結論では、各章を整理し、成果と課題を述べている。本論文の成果は、川端のモダニズムの方法論に基づくテクストがもたらした言語表現の変革と可能性を明らかにした点にある。近代小説の書き方、特に、近代小説に内在する〈詩的精神〉の諸相を考察し、戦後の長編小説が展開する方法論的な接続の可能性を追求することの必要性を述べ、さらに今後の展望を付け加えて本論文を締めくくる。